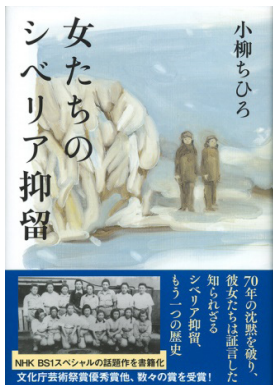


読む 小柳 ちひろ著

『女たちのシベリア抑留』（文芸春秋刊）

再読に値する極限状況を生きた女たちの物語



山口 ミルコ（エッセイスト）
私は元編集者なので、本を手にするのと真っ先にカバーを外して、表紙や見返し、奥付をまず見てしまう。本の巻末には版元はもちろん発行日、印刷所、装丁家など本に関わった人びとや会社の情報がクレジットされている。

NHK BS1スペシャルの番組の書籍化である本書では、撮影や音響の技術さんからテレビ局の偉い人まで、制作を手掛

けたスタッフみなさんの名前がずらり並んでいる。

こういう本はたいいてい、つまらない。

番組作りのプロたちが作った映像作品がちゃんとあるのだから、それを見れば十分であり、本で読むことないんじゃないの？ …と当コーナーの執筆依頼を受けて、私は不機嫌になった。

そこには嫉妬の成分も多少含まれている。映像の書籍化、映像化される書籍、その二種類がよく売れる時代に編集者をやってきた私は、「いいよね〜、テレビはさー」とつい思ってしまう。まあ長らくその恩恵にあずかってきた身でもあるのだが。

さて、で、本で読んでどうだったかといえ、読んでよかった。

なので私はこれを書いている。

読み始めると読みやすいつくりで、読まされてしまった。

番組のディレクターでありこの本の著者となった小柳ちひろさんの体内には、10年以上の歳月をかけて集めてきた戦争証言の数々が、ツブツブの細胞となって息づいているのだろう。

彼女のプロフィールを眺めれば、我が家にストックしているドキュメンタリー作品が何本かあるが、どれも証言者の言葉一つ一つが丹念に引き出された労作で、なかでも今回書籍化された『女たちのシベリア抑留』は、テーマにたいする送り手の執念だろうか、胸にずしり響いてくる。見終わったあとにも映像に出てこなかった人物までもが気にかかり、その余韻にしばらく追いかける。その余韻を受け止める役目を担ってくれるのが、ようは本書ということになる。

戦争が終わったのに戦争をやめなかったソ連（当時）に日本人60万人が抑留された。戦後75年経ってもロシアとの共同研究は進まず、外国籍元抑留者の処遇や遺骨収集など問題も山積している、依然なぞの多い「シベリア抑留」。本書はこれまで取り上げられることの少なかった女性抑留者の話でありながら、シベリア抑留入門編でもありと言えなくもない。

「1000人近い女性たちがシベリアの収容所抑留生活を送った」と言われても、そもそもこの千という数字や、シベリア、抑留、といった言葉にピンとこない人がたくさんいるなかで、こうした分かりやすい本が世に出たことは心強いと思う。私自身もこの10年の間「シベリア抑留」への関心が高まり、研究者の方やジャーナリストの皆さんと交流を続けてきたが、当問題への世間の冷たさを感じてきた一人であるからだ。

暴行のおそれに常時さらされていた女性抑留者のみならず、誰もが生死のかかる過酷な状況下において、それでも女性を守る男性は守り、守らない男性は守らないのだと、あらためて思った。身内を敵に売る人はいつの時代にもいるものだ。

一読した時、本の表の顔と中身が合っていない気がした。

再読以降は腑に落ちた。取り上げられる人物が多く、エピソードがあっちへ行ったりこっちへ行ったりするが、看護婦たちのハラショー・ラボータぶりやソ連人との交流、帰国後の労苦などに胸揺さぶられるうち物語は佳境へ、読み応えはこと最終章にあるので、途中で本を放り投げてはならない。

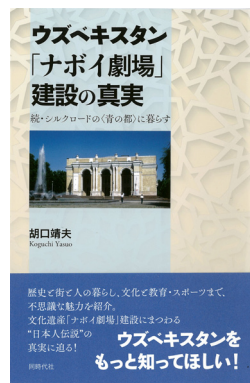
（2019年12月刊、四六版・320頁、1,700円＋税）

胡口 靖夫著

『ウズベキスタン「ナボイ劇場」建設の真実

続・シルクロード〈青の都〉に暮らす』（同時代社刊）
『ナボイ劇場伝説』の安易な日本人礼賛論を批判

有光 健（シベリア抑留者支援センター）



ウズベキスタンの古都サマルカンドで約10年日本語を教え、現在はウズベグ人の妻と東京で暮らす胡口靖夫サマルカンド国立外国語大学名誉教授（78歳）がウズベキスタンについて著した三作目。『シルクロード〈青の都〉に暮らす』（同時代社刊、日本図書館協会選定図書、2009）『ウズベキスタンと現代の日本』（同、2016）の続編。当初から三部作の予定ではなかったが、ジャーナリストの畠信彦氏が著書『日本兵捕虜は

シルクロードにオペラハウスを建てた』（角川書店2015）『伝説となった日本兵捕虜 ソ連四大劇場を建てた男たち』（角川新書、2019）でタシケントのナボイ劇場建設に関わった日本人捕虜を礼賛するあまり、まるで劇場建設全体が日本人捕虜の功績のように描き、著しい「日本礼賛論」に傾斜していることに警鐘を鳴らし、正確な歴史を刻むために本書を上梓したという。

一部のエピソードを取り上げて、実は日本の軍人は立派だった式の一方的な称賛本が近年少なくないが、首都タシケントのナボイ劇場にまつわる伝説もそのひとつ。1966年の大地震で、タシケント市街地のほとんどが壊滅したが、ナボイ劇場は倒壊せず、その建築のすばらしさが見直され、その建設に当たったのが日本人捕虜だったので、日本人はすばらしいという三段論法だ。

確かに同劇場建設に日本人捕虜457人が参加したことは事実だが、1940年から工事は始まり、日本人捕虜がタシケント市に強制移送されてきた1945年11月には、すでに建物の骨格は出来上がっていて、1949年10月までに日本人捕虜が従事したのは、建物の内容・外装、周辺の整備など「仕上げ工事」で、設計も建設の主体・主力はソ連、ウズベグ人だった。1400人収容、3階建ての壮大な同劇場内の装飾はたしかに見事で、日本からの訪問者を今も感嘆させるが、建物建設全体が日本人捕虜に委ねられたように記述することは歴史の歪曲で不誠実だと著者は厳しく批判する。

今回著者が入手したのは2012年発行の『歴史の反響』誌の同劇場特集号で、同劇場設計と建築の経過をつまびらかに検証している。今後中央公文書館の公文書などが入手できれば、さらに詳細が明らかになる可能性もあるが、誰が劇場を建てたのか？はすでに明らかだろう。

畠信彦氏（元毎日新聞記者）だけでなく、同じジャーナリストの伊藤千尋氏（元朝日新聞記者）の旅行記『凜とした小国』（新日本出版社、2017）に記されたウズベキスタンについての記述の誤りも実体験に即して指摘、安易な見聞記を戒めている。

後半は、ウズベキスタンに関するエッセイで、いろいろな話題がコラムも含めて盛り込まれ、旅行の参考になる。

（2019年12月刊、四六版・284頁、1,800円＋税）